



- 体育会名：関西学院大学体育会ワンダーフォーゲル部
  - 創部年：1955年(昭和30年)
  - 2025年度会員数：37人(4年12人、3年6人、2年8人、1年11人)
- 
- 同窓倶楽部名：関西学院大学体育会ワンダーフォーゲル部同窓倶楽部
    - \* 関西学院同窓会 公認団体
  - 同窓倶楽部通称：関西学院大学体育会ワンダーフォーゲル部 OB・OG 会
    - 設立年：1958年(昭和33年)
    - 会員数：560人(男性420人、女性140人)
    - \* 物故者含む

## ワンダーフォーゲルの起源と大学での活動

ワンダーフォーゲル活動とは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ドイツに起きたワンダーフォーゲル(渡り鳥)と称される若者たちの人間回帰・自然回帰を目指す運動であった。テントを担いで野山を歩き、焚火を囲んで友と語り、共に肩を組んで山の歌を歌う。そのように仲間とともに自然を楽しむスタイルが、日本の学生にも共感を与えたといえるだろう。

日本の大学のワンダーフォーゲル部の活動は、1935(昭和10)年の立教大に始まり慶大、明大と続いたが太平洋戦争で中断。戦後は国土の特徴たる山岳地帯に深く分け入ることを求めて新たな活動が始まった。関東では中大、早大、東大等が、関西ではわが関西学院の創部が起点となり、京大、同志社、関大等が加わる形で拡大するとともに全国の大学に波及して行った。

体育会ワンダーフォーゲル部は、戦後10年目の55年創立である。まずは同好会として、3年後に体育会所属クラブとして、61年には正式な体育会の部として承認された。この間、最盛期は80名を越える部員を擁し、無雪期の北アルプスや東北、北海道に活動範囲を広げ、積雪期の山スキー活動を開始。本部校として関西学生ワンダーフォーゲル連盟を設立し、自前の山小屋建設に向けて動き始めた。初代部長小宮院長の後押しを含め創部時代の現役部員の並々ならぬ努力が伺えるとともに、体育会昇格への機運が部を活性化し運動部としてのスポーツ性を大きく高めたといえる。

## 戸隠山小屋とその役割

体育会昇格の翌62年、3年越しで設立準備を進めてきた山小屋が標高1200mの長野・

戸隠高原に完成した。妙高戸隠連山国立公園の中央に位置し周囲を2000m級の山々と木々に囲まれた50名収容の大型宿泊施設である。資金集め、土地購入、設計施工まで現役部員と卒業間もないOBが奔走し、最終的に大学の協力の下に完成にこぎ着けた。そうして完成した山小屋を大学に寄贈することで学院関係者の誰もが使用出来るものとした。

以来、部では無雪期のみならず積雪期登山と山スキー活動の基礎練習を存分に行えるようになり、1年の半分を山スキー活動に専念出来るあらたな体制が整いはじめた。

### 「スポーツワンダリズム」から「戸隠からヒマラヤへ」

体育会昇格と前後して、活動は初期の山野の跋涉からスポーツ性を付加する形で、登山道の無い藪漕ぎや沢登りそしてより記録の少ないコースを目指す「スポーツワンダリズム」を標榜するようになる。さらに近年では、長年に渡る戸隠山小屋でのスキー訓練実践を通じて「日本一の山スキー部へ」や「戸隠からヒマラヤへ」との合言葉を掲げる代が続いているなど、スキー登山への志向を強めており、山スキー部ともいえる内容と方向性が定着しつつある。

### 海外遠征

最初の海外遠征は71年で、ジャングルの上に聳え立つニューギニア・ウイルヘルム山(4508m)とそれに続く背稜山脈を世界で初めて縦走する、探検的要素の強いものであった。ボルネオ・キナバル山(4095m)、韓国・智異山(1915m)がこれに続き、初の山スキー活動はイラン・ダマバンド峰(5610m)の登頂・滑降であった。

それ以降、海外遠征はヒマラヤ・メラピーク(6476m)、第2次メラピーク、ロシア・クリチエフスカヤ峰(4750m)、第3次メラピーク&イムジャツェ峰(6180m)、そして最新となる2025年度ヒマラヤ・プタヒウンチュリ峰(7246m)への挑戦と、そのほとんどが高峰でのスキー登山を意図するものである。

これらの海外遠征は企画から遂行まですべてを現役部員が担い、監督コーチ会とOB・OG会がこれを強力に支援する、部独自のサポート体制に支えられたものとなっている。

### 事故そしてコロナ禍

ただ、ここまですべてが順風満帆に推移して来た訳ではなく、国内活動において数度の悲し

い事故も経験して来た。岩場で滑落しかけた新人部員を救わんとした上級生の死亡事故があり、2度目は学内紛争の混乱により準備もトレーニングも不足するなか初めて行われた新人合宿で、温度・湿度の急激な上昇と進行する「熱中症」に対処し切れず若き部員が命を落とした事例である。また、記録的な大雪に見舞われた福井県の大長山で、男子部員14人全員が雪洞に閉じ込められヘリ救出された事例もある。

それぞれ反省自粛期間を通じ、また毎回の監督コーチ会での厳しい検討を通じて、他の要因を含め2度と事故を起こさない・起こせない具体的な対策を共有する努力を、OB・OG含め部として行って来た。また、近年のコロナ禍では合宿も個人山行も厳しく制限され、山小屋は閉鎖、部員獲得もままならず、約2年間部活動はきわめて深刻な状態に陥った。ここでも、1人用テントの導入や山小屋の抗菌カーテンによる個室化などOB・OG会が強力な支援を行い、また若手コーチ陣の現地指導、現役部員の懸命の努力が相まって、ようやく従来に近い部活動態勢が整った。

### 山岳活動のリスクと危険

過去の事例を挙げるまでもなく山岳活動は常に生命の危険を伴う行為である。1年の半分以上を雪山での山スキー活動に当てている当部の場合、必然的に雪崩・滑落・低体温症の重大な危険を伴うリスクが付随することになる。山岳活動における広い意味での危険性には、登山と山スキーの経験と体力、知識と技術によって想定が可能ないわば「避けることの出来るリスク」があり、また逆に数10年に1度の特別な気象状態など、想定が困難ないわば「避けることが難しい危険」というものもある。

当部で最も重視するのは避け得るリスクを事前に回避し対処出来る方策を準備することである。そして避けるのが難しい危険には事後の対処を準備しておくことである。前者は「安全対策」と呼ばれ後者は「遭難対策」と呼ばれる。「計画が7割」と言われる山岳活動の世界において事前の準備は何より重要であると考えたとともに、かつて痛恨の事故者を出した当部では、常に事後の準備を並行して行うべきこととしている。

### 監督コーチ会とOB・OG会の役割

現役幹部を含む監督コーチ会では、現役部員から上がって来る山行計画と山行報告につき、リーダーとメンバーの知識・技術・体力・経験を勘案し、PDCA(Plan・Do・Check・Action)の各段階を通じ、事前のリスクチェックと現に起きている問題のチェックを徹底して行っている。

一方、OB・OG会内の遭難対策委員会では、現役部員の万一の事故発生に備えて出動体制を整えるとともに万一の場合の為に必要な資金を準備している。またOB・OG会では雪崩対策に必要な高額装備品購入の支援や山小屋運営そして海外遠征の支援も行っている。

### **外部との繋がり**

部では16年から関西圏各大学と近隣高校の山岳団体に呼び掛け、専門家を招いて無料の雪崩講習会を開催している。近年ではこれに加えて山岳気象の第一人者を招いた講習会も開催している。これらの活動を通じて、高度で専門的な知識を得るとともに、山岳部・ワンダーフォーゲル部・探検部の垣根のない交流と、高校生の山岳活動への啓蒙を企図している。戸隠では近隣に山小屋を持つ京大山岳部や環境省とロングトレイル設置活動で協働をした。今後は山岳部と連携し、KGADの一員として関学スポーツ全体の発展にも寄与していきたい。

### **あらたな時代のあらたな潮流**

25年9月、国内における自らの部活動の総仕上げとして4年生中心の男女パーティが日本海から北アルプス・中央アルプス・南アルプスを全山縦走しすべて歩いて太平洋に至る、いわば「日本アルプス縦断山行」を敢行した。初の7000m級のヒマラヤ遠征をはじめ、これらの並外れた活動が示すものは、以前は引退が当たり前だった4年生が、積み上げて来た知識・技術・経験を生かし安全範囲の中で自らの限界に挑戦する姿である。それらがあらたな時代のあらたな潮流として、関学ワンダーフォーゲル部が今後に進んで行く方向を指し示しているように思われる。

体育会ワンダーフォーゲル部 部史編集担当者 竹内 宏規（昭和51年法学部）